
ユキティアのお姫様！（仮題）

月見野菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユキティアのお姫様！（仮題）

【Nコード】

N4642H

【作者名】

月見野菜

【あらすじ】

ユキティアという王国の姫・リティア。彼女の周りには、おかしな人だらけ。髪フェチの兄だとかなんだとか！！

物語 1 - 1

昔々あるところに……。

そうは言っても、昔ではありません。現代という区切りも無いです。今は今です。

わたくしのお父様の王国、ユキティアがありました。そして、その近くには魔女の森があり、そこにはとても美しいお姫様が捕えられていました。

ところで、なぜわたくしが日記を昔々から描き始めたのかと言うと、わたくしのお兄様が読んでくれた物語はいつもそう始まっていたからです。

* * *

「昔々あるところに、美しいお姫様が住んでいました」

わたくしは小さい頃、おとぎ話が大好きでした。特に、三つ年上のお兄様が読んでくれるお話はいつも美しくてハッピーエンドで……。それが、とても愛おしくて、今も忘れられませんでした。

今年で、わたくしも十と五歳になります。

そろそろ他国へと嫁ぐとき。だけれど、いかんせんわたくしは口下手でお兄様以外の男の方とまともに話すことが出来ない恥ずかしがり屋なのです。

そんな妹を見て、お兄様はいつも「顔は良いんだけどなー」と笑います。ああ、恥ずかしいですお兄様。

わたくしのお兄様であるレシア・ユキティアは今年で、十九歳になられます。

普通の王家の殿方であれば、すでに他国から女性を娶られ、王家を継ぐはずなのですが、お兄様はとても好みがるさいのです。

ただうるさいだけであれば、お父様や他のお兄様やお姉様の言葉でなんとか改心したかもしれません。でも、わたくしのお兄様は……ああ、その………レディがこんなことを言っても良いのでしょうか。

レシア・ユキティアは

女性の、か、髪フェチ。なのです………。

言ってしまいましたわ！

良いのでしょうか？ わたくし、お兄様の紹介をただけなのに、なんでこんなに恥ずかしいのでしょうか！！
ふう。

そうなのです。このお兄様のフェチズム……いえ、妥協点としたほうがまだ良いのでしょうか？ これがあるから、お兄様はご結婚することも出来ないのです。

だからといって、王家が途絶えてしまう。ということは無いので、その点は安心です。（わたくしのこういう発言を聞いて、ちゃっかりした妹だねいつも笑われてしまいます）

理由はわかると思いますが、お兄様は長男では無いのです。ちなみにわたくしも、姉妹の中では上から三番目、下から二番目です。兄と姉と弟と妹を足すのなら、わたくしは上から五番目なのです。八人兄弟というやつです。

一番年の近いわたくしとお兄様の仲が必然的によくなってしまったのもわかるでしょう？

わたくしは、お兄様が大好きなのです！！

まあ、髪の毛に関しての妥協点は少し残念だと思えますけど……。（お姉様たちは、いつまでも独身のお兄様を見て「やだレシアちゃん。キモイ」「髪フェチとか流行らないよ」と言っておられます）
そのお兄様が！

これまでに妥協点のせいで百件近くのお見合いをお断りしてきたお

兄様が！

運命の相手を見つけた。とおっしゃっていたのです。

一体、どういふことなのでしょう？

物語 1 - 2

美しいお姫様は、ある日王子様に出会いました。二人は互いに見つめあい一目ぼれをしたのです。

王子様は、そのお姫様を魔女の森の屋敷の中から助け出そうとしました。

だけれど入口にはたくさんの恐ろしい姿をしたモンスターが、見張りをしているのです。

お姫様は魔女の屋敷の一番奥の塔の一番上に閉じ込められています。だから、王子様は考えました。

いったいどうしたら、お姫様を助けられるのか……。

もう！ お兄様。わたくしの日記を勝手に見ないでくださいませ！
この間のことを書き綴っているだけなのです。けして脚色などしていません！

ああ、なにするんですかお姉様！

* * *

「リテイ。魔女の森に行かないか」

「ほえ？」

お兄様の突拍子も無い発言に、わたくしはついおかしな声をあげてしまいました。

それにしてもお兄様、笑顔で何を言ってるんでしょう？

口下手でちよつと引っ込み思案なわたくしには理解が出来ません。

「お兄様。魔女の森へ行くとは……どういう……」

「んー？ そのままの意味だけ」

あはつと楽しそうに一般的に「能天気」と表現されるその表情を見て、わたくしはまたお兄様の悪い病気が発症したことを確信したの

です。

あれは、わたくしが十歳に満たないころ。少女であったときの話です。

お兄様は今より幼い顔を、大人になっても変わらない「能天気」な表情に変えて、

「あは。リティリティ、城の中にあるさーあのベランダの手すり歩かない？」

と問うてきたのです。

わたくしの世界は、このころ8割がお兄様を占めていましたので、よくわからないままに「おにいちゃま、なにをしますのー？」と言って、そのままお兄様に付いて行ってましました。

これが良くなかったのです。

「まあ見ててよー」と言いながらお兄様。見事にベランダの手すりを歩いたので！

白く細い手すりの上を器用に歩くお兄様のことを、すごいとも思う反面、落ちてしまいわ無いかととても心配でした。

ベランダの下は少しお手入れの行き届いていない草むらでしたが落下したら怪我すること請け合いだからです。

しばしハラハラしながら、サーカスでも見ているかのように「おにいちゃま、おにいちゃまっ！」とつぶやき、お兄様の奇行を、幼い私は見守りました。

そして、案の定と申しますか、お兄様は……。

「あははははー」

……………手すりから落ちました。

わたくしは若干パニックに陥り、先ほどまでお兄様が歩いていた手すりを掴んで、下を見下ろし「おにいちゃまー！ー！」と叫んだのを、今でも鮮明に覚えています。草むらの上で微動だにしないお兄様を見たわたくしの幼い心にトラウマ必至です。

本当に動かないので、わたくしは慌てて二人のお姉様（エトお姉様とルルお姉様）とレシアお兄様よりも三つ年上のマティお兄様を呼びに走りました。

わたくしが、お兄様が手すりを歩いていて落ちた！ と説明しますと、三人とも大爆笑。

何がおもしろいのか、パニック状態に陥っている9歳のわたくしにはわかりません。

マティお兄様が「面白そうだから、レシア見に行こうぜ！」と言って、わたくしの手を引き、ルルお姉様を連れて、庭へ向かいます。

エトお姉様は、ちょっと笑いながら、お医者様に連絡されています。

こうして、レシアお兄様は無事救出されたのです。

しかも驚くことに、お兄様……無傷でした。もうこれは、超人と呼ぶしかありませんわ。

ということ思い出すと、わたくしはなんだか溜息をこぼしたくなってきました。

「ハア……」

「ん？ 溜息なんてついてどうしたんだい？ リティ」

「どうしたもこうしたもございませんわお兄様……。どうして突然魔女の森へ行きたいなんておっしゃるのです？」

「運命の人に、出会ったからさ！」

「……運命の、人？」

しばし、お兄様の言っていることが理解できず、わたくしは首を傾げました。

「そう。そうなんだよリティ！ 僕は運命の人に会ったんだ！」嬉しそうにニコニコ笑いながら紡がれるお兄様言葉を聞いていると、だんだんその意味を理解してきました。

……運命の、人？

それは、もしかして。

「お兄様！ 好きな方が出来たのですか！？」

「へへ。まあ、そういうことも言えるかなー」

「す、す、素敵ですわ！ お兄様あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」
わたくしの頭の中で、お兄様が幼いころに読んでくれたおとぎ話がよみがえってきます。

お姫様を好きになって、そのお姫様にアプローチする王子様。

「で、そのお姫様はどこにいますの！？」

「やー。お姫様かは、わからないけどねー。うん、だから魔女の森」
ニコツと、お兄様が笑います。

と、いうことは魔女の森に閉じ込められているお姫様を助けに行く
というのですね！

「わかりました。お兄様、行きましょう！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

物語 1 - 3

王子様はまず、塔の上にいるお姫様ともしっかりと仲良くなるために、可愛い妹を連れて魔女の森へ向かいました。

お姫様を助けようと思った王子様ですが、彼女が本当にお城から助け出してほしいのかわからなかったからです。

梯子に登って、王子様の妹はお姫様とお話します。二人はすぐに仲良くなって、たくさんお話します。

王子様はそれを下から見上げて、微笑むのでした。

きや、脚色しすぎだなんて、そんなことはありませんわ！

わあ！ だから、見ないでくださいませ！！

* * *

「いや、必要なのは、梯子と髪の毛のケア用品だ」

これは、わたくしが何かお花などのプレゼントは必要ないのですか？ と聞いた時のお兄様の返事です。

返事を聞いて、わたくしは思わず「ハア？」と素っ頓狂な声をあげてしまいました。

どう考えても、梯子と髪の毛のケア用品なんて、女性に差し上げるものではありません。いえ、ケア用品はまだわかりますが梯子なんていったい何に使うのでしょうか？

片手に梯子を抱えるお兄様に手をひかれ、わたくしは魔女の森へと入ります。

森は、出入り禁止となっているわけでは無く、出来れば入らないようにしてねという注意書きのみが前に存在します。なのでお兄様は

「絶対入っちゃいけないんじゃないから良いよね」と笑いながら言
つて、躊躇なく入って行きました。

わたくしは魔女の森には初めて入ります。

とてもオドロオドロしい、不気味な森かと思っただけですが、なん
てことは無いただの森でした。

お兄様は慣れた足取りで森の中を横断していきます。荷物になつて
いる梯子と髪の毛のケア用品を入れたバッグはお兄様ご自分で抱
えられているので、わたくしはただ手をひかれています。

何も言わず、相変わらずニコニコしながらお兄様は歩いていきます。
だけれど、途中でわたくしのほうを振り返って聞きました。

「リテイ。リテイは、高いところは平気かい？」

「高いところ、ですか？」

「うん。高いところ」

「はい。たぶん大丈夫です」

お兄様の手すりから落下したのを見た時は、高いところがトラウマ
になりかけましたが、わたくし自身が落下したわけでは無いので、
それほど深い心の傷にはなりません。良かったです。

「そうか。なら、安心だな」

「安心……ですか」

「ああ。安心だ！ あと、髪の毛のケア用品の使い方はわかるかい
？」

「それも、たぶん大丈夫ですけど……」

「そうか。リテイはなかなか心強いな」

心強い。この言葉が、わたくしの中にジンワリと広がっていきまし
た。（よくわかりませんが）お兄様に褒められることは、わたくし
の中で、とても名誉なことなのです。

……ところで、高いところと髪の毛のケア用品の使い方になんの関
係があるのでしょうか？

「お兄様」

「さ、着いたよ」

問おうとしたところでそういわね、顔をあげると、そこにはお屋敷
がありました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4642h/>

ユキティアのお姫様！（仮題

2010年10月9日03時07分発行